



Vol.28
September 2018

CONTENTS

活動報告 SUAC Report

- 今、「京都観光」を再考する
石本東生 / 文化・芸術研究センター 2
- 英語多読を通じた学び合いの場
上村明英 / 英語・中国語教育センター 3
- 翻訳書の刊行：『ラヴェルスタイン』
鈴木元子 / 国際文化学科 4
- 『中東欧の文化遺産への招待』刊行と学部間共同研究の可能性
四方田雅史 / 文化政策学科 5
- 地域の劇場文化を日本の顔に
永井聡子 / 芸術文化学科 6
- 地域に研究室を持つということ
磯村克郎 / デザイン学科 7
- 2017年度研究事業一覧
インフォメーション 8

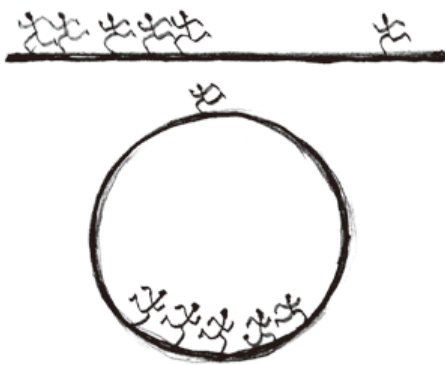
静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●https://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



副学長
寒竹伸一
Shin-ichi Kantake

変わることができるサル



周回遅れの歩みもなかなかのものであります。
遅れの時間は、社会と私とのズレからくる困難と面倒からもたらされるものなのですが、このズレがもたらしてくれるものは、考えることを知るための時間であり、自分が変化する機会を与えてくれる時間でもあるように思われます。この歩みも一直線と考えるのではなく円環であると考えてはじめて成り立つのですが、この歩み方の中において近き人達との困難で面倒な関係によって自分が変化できるのだと思います。

子供は同じ物語を何度も何度も繰り返して聞くことを要求してくる面倒な存在であります。オオカミ少年という昔話は、ウソについてはいけません、というメッセージが込められているものと気にもしていませんでした。私も親からそう教えられたように思います。子供に読み聞かせるまでは、その常識に無関心でしたが、何度も読み聞かせているうちに、もしオオカミが来るということが本当であれば村の羊はみんな食べられてしまうのに、村の人達は何故にもう一度羊飼いの少年の言うことを信じてみなかったのだろうか、ということでした。

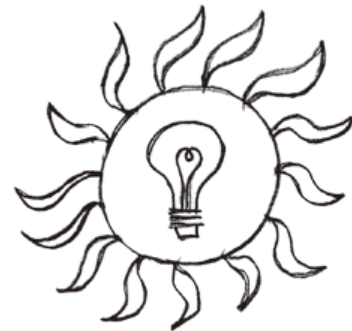
羊飼いの少年の情報とオオカミが来る来ないということに因果関係はないのに、それを関係付けてしまった村人達の失敗でもあるということも子どもに伝えることにしました。



運転中の私に、幼稚園年中時だった息子が「太陽の中には電球がいくつ入っているのか。」と困難で面倒な質問をしてきました。太陽の中には電球はありませんので、彼のわかる範囲内の数字を言っただけはウソになります。

しばらく考えて「太陽が輝いて見えるのは、水素がヘリウムに核融合しているからである。」と答えました。その時、息子は何も問い返しませんでしたが、中学生になった今は少なくとも私の答えは間違いではなかったことを知っています。

相手が理解できる答えは、その時にあるとは限らないということを知りました。



東浩紀氏の新聞のコラムを、多少編集して紹介させていただきます。

ひとりの人間が変わるといふのはたいへんなことで、「いいね!」をつけるようにポンポン複製できるものではない。ぼくが一生涯かけて変えることができるのは、ごく少数の身の回りの人々だけであり、そしてぼくを変えることができるのもおそらく彼らだけである。家族も友人もあつというまには作れない。面倒な存在でもある。だからこそそれは、変化の受け皿となる。面倒がないところに変化はない。情報技術は、面倒のない人間関係の調達を可能にしたが、それはまた人間から変化の可能性を奪うものであった。

今、「京都観光」を再考する

～重伝建地区「産寧坂」におけるパークハイアットの進出を前に～

石本 東生 (文化・芸術研究センター)

◆京都屈指の観光エリア「産寧坂」の今

本年3月末まで大阪の高槻市に在住していたこともあり、京都は研究調査でも、個人的にもよく訪れた。今や、京都への年間入浴客数（日本人＋外国人観光客）は、2014年から3年連続で5,500万人台を突破し、言わば「オーバーツーリズム」の傾向が見られる。京都市の観光統計によれば、外国人旅行者が最も多く訪れる観光スポットは、清水寺とその北西側に続く産寧坂・二寧坂・石堀小路の界隈となっている。

その坂道は、歴史上清水寺への参拝客が参詣の折にお土産を買い求めることで賑わい、発展してきた。現在、産寧坂一帯は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、街の景観は厳しく保存されている。一方で、今や清水寺とは特に関わりもない観光関連企業やレストラン、カフェ等のテナントが、京都の域内外から競うように出店しており、その勢いは年々ヒートアップしている。店の新陳代謝が激しく、それだけ時代の変化に適応した新規出店が多い。だからこそ、観光客を飽きさせないとも言えるだろう。

他方、京都屈指の人気観光エリアのため、テナント賃料は坪3万円程度まで跳ね上がる。つまり、物件によっては一棟貸しで月額200万円という高額コストになるのも、まったく珍しくない。再生された古民家にも、お洒落な店舗が次々と展開することは、確かに産寧坂をよりカラフルに彩っているのだが、その背後では、進出企業がコストの回収とさらなる収益確保のため、大変な努力を強いられるのは、想像に難くない。

そこで年々目立つようになってきたのが、極力生産コストを抑えたアジア諸国産の「京雑貨」や「レンタル着物」である。実に筆者が残念に思うのは、第一級の歴史的景観の街並み「京都・産寧坂」において、まさにそのレベルに合う商品・食・サービスを提供する店も少なくないものの、今やそれに適わない（低品質の）モノが溢れすぎていることである。

さらに、近年、産寧坂エリアにおいては、観光支出額の大きいオーストラリアや欧米、ロシアなどからの観光客よりも、圧倒的にアジア諸国からの旅行者を多く見かける。ところが、数年前の中国人観光客をはじめとする爆買いなどは、既に無きに等しいという。

このような状況で、京都観光は今後も「数字の更新」を求め続けるべきなのだろうか？「記録として残る」以上に「記憶に残る」観光、すなわち観光の質的転換は、喫緊の課題ではないだろうか。

◆山荘京大和とパークハイアットの進出

ところで、2016年11月、あるセンセーショナルなニュースが伝えられた。二寧坂が位置する東山区樹屋町に2千8百坪という広大な敷地を持ち、京都屈指の老舗料亭と称される「山荘京大和」が改築され、さらに同敷地内に米高級ホテルチェーン、ハイアットホテルズアンドリゾーツの最上位ブランドである「パークハイアット」が開業する、との計画が発表されたのである。具体的には、(株)竹中工務店が「山荘京大和」を運営する(株)京大和から敷地を賃借してホテルを新築した上、歴史ある

料亭の木造建物や庭園は保存・復元を図る。また、料亭部分の保存・復元工事終了後は山荘京大和が営業を継続する。そのため、料亭とホテルが同居する珍しい形態となる。計画によると、ホテルは地上2階地下4階建て、客室数は70室程度となり、二寧坂に面した古都の景観に調和するように低層とし、宴会場やレストランも併設、2019年の開業予定である。

哲学者であり、京都市立芸術大学の学長を務めた梅原猛は、「私は、京都市街がもっとも美しくみられる料亭はどこかと問われれば、躊躇なくそれは京大和であると答える。京大和はちょうど京都市中央部の東山沿いの高台にあるので、そこから京都の市街が一望できる。間近に八坂の塔がそびえ、あたりには多くの民家の瓦屋根が美しく並ぶ。遠くには愛宕山が見え、南に東西本願寺が見え、北には二条城や御所が望める…」と述べ、京大和と周囲を含めた景観を讃えている。

先代の京大和社長、故阪口祐男氏は生前、和の粋を集めた翠紅館などの建物群と庭園、さらには長い都の文化や芸術を表現する調度品に京料理、京都が有する特性を最大限に生かした舞台とした。また、国内外のコンベンションの開催や賓客のおもてなしを行う、国際的な交流拠点として活用してもらえるように、京大和を再編していきたい、と意気込みを語っていたという。

◆今こそ、量から質への転換を

確かに今や、インバウンドの交流人口は「全国的に見ると」さらなる増加が期待され、倍増さえも願われる。しかし、殊に「京都」が近年直面するオーバーツーリズムを軽減し、且つ観光収入を伸長させるためには、「量（数）から質への転換」が図られるべきではないだろうか。その意味で、ハイアットホテルズの最上位に位置づけられるパークハイアットが、美しく整った二寧坂の街並みに調和する形で出店することは、国内外から高級志向の旅行者を一定数招くこととなり、この地域の価値をさらに高めてくれるものと筆者は信じている。このプロジェクトが、将来的な京都の観光まちづくりに示唆を与えるモデルケースとなるべきことを、切に期待している。



ホテル施設に転用される京大和の「京林泉」(筆者撮影)

英語多読を通じた学び合いの場

上村 明英 (英語・中国語教育センター)

はじめに—英語多読を知っていますか？

英語多読とは、すらすら読めるレベルの本をたくさん読むという英語勉強法です。自分の好きな本を選び、辞書を引かずに読むことで、英語に親しんでいきます。英語が苦手だった学習者も楽しめる、簡単に読める本を読むので自信やモチベーションの向上につながる、英語で英語を理解する能力が身につく、といった効果が期待できます。20年程前から特に社会人の英語教育として注目され、現在では学校教育においても徐々に広がりを見せています。本学でも1、2年次に開講される英語コミュニケーションの授業で取り入れられるようになりました。

多読三原則

1. 辞書を引かない (引かなくても分かるやさしい本を選ぶ)
2. 分からないところは飛ばして読む (本筋と関係の薄い未知語は気にしない)
3. つまらなくなったら後回しにする (1, 2の原則で楽しく読めない本は無理して読まない)

社会人の英語多読学習者もいることから、近年では公立図書館の中にも多読図書を配架する例が出てきました。全国的に見ても東海地方は英語多読図書が導入されている公立図書館の多い地域で、浜松市でも2015年から英語多読が始められるようになりました。現在は中央図書館、都田図書館、積志図書館に英語多読用の蔵書があります。セミナー等も開催されていて、英語多読学習の環境が整っています。英語多読の始め方については、文末に参考として挙げた浜松市立図書館ホームページの英語多読コーナーを参照してください。

11月26日(月) 浜松市立中央図書館にて、「図書館多読への招待」と題したシンポジウムが開催される予定です。興味があればぜひ参加してみてください。

多読学習における地域と大学の連携

これから多読を始めたいと思っている方、またすでに多読を始められている方には、ぜひ市立図書館と本校の図書館を併用し、行き来しながら学習していただけたらと思います。

それにはいくつかの利点があります。まず何より、より多くの本にアクセスできるという点です。英語多読における最大の課題は、本の調達です。何百冊、何万語という量の英語を読んでいくため、非常に多くの本が必要となります。また、学習者が自分に合ったレベルの、好きな本を選ぶためには、多彩な本が揃っていることが大切です。

市立図書館には、多読学習を始める際にまず読んでもらいたいOxford Reading Treeといった低めのレベルの本が充実しています。一方、大学の図書館には入門シリーズ読破後からペーパーバックを読むまでの間に読むようなレベルの本が多くあります。複数の図書館を利用し、ぜひたくさんの楽しめる本

を探してください。

また、大学の図書館に足を運ぶことで、英語学習だけでなく、幅広い分野の知識を得ることができます。本学の図書館には、市立図書館では見られない専門書や特に文化・芸術分野の資料が多く取り揃えられています。また、セミナーや公開授業等も定期的実施されています。これらの様々な情報を得ることで、学びの意欲や範囲が拡大していくことでしょう。

市民の方々が大学の図書館に来られることは、学生にとってもメリットがあると考えられます。大学卒業後も学び続ける姿を見て、学生も学びの意欲が増すかもしれません。さらに、多くの経験をされてきた様々な世代の方と接する機会が増えることで、学内では得難い出会いや学び、広い視野を得ることが可能になります。

このような地域と一体となった学びの共同体を多読学習を通してつくるのが、私の理想です。実際にこのような学びの場がすでに実現している地域もあります。愛知県にある豊田工業高等専門学校では、公開講座や無償の英語多読体験会を開催しており、多読のために学校図書館へ来館する学外利用者数も多くいます。また公開講座が開かれて以降、市立図書館の英語多読図書や一般洋書の貸し出し冊数も増加しているそうです。学校が学生だけでなく、一般市民の生涯学習の場として機能しているいい例だと思います。

今後の展望

少しでも興味を持たれたら、まずは一度図書館で英語多読図書を手にしてみてもらいたいと思います。そしてぜひ静岡文化芸術大学へも足を運んでみてください。本学の図書館は、素晴らしい蔵書と学習環境を整えています。一歩足を踏み入ると、学ぶ意欲が湧いてくるのではないのでしょうか。今後、このような学内および学外の英語多読学習者を支援するため、蔵書の拡充、選書しやすい配架の工夫、多読サークルといったサポートも充実させていきたいと個人的に考えています。

英語多読は継続的に英語の本に親しんでいくことで英語力を身につける方法です。途中で挫折しないためには、同じ英語多読学習者同士のコミュニケーションやアドバイスが不可欠です。その中で世代や所属の枠を超えてお互いに学びあう場を一緒に作っていただけたらと思っています。

参考：

西澤一、吉岡貴芳、伊藤和晃 (2008) 「英語多読を通じた図書館の授業支援と地域貢献」

<<http://jera-tadoku.jp/papers/nishizawa-2008-03.pdf>>

2018年8月20日アクセス。

浜松市立図書館 英語多読コーナー、

<<http://www.lib-city-hamamatsu.jp/guide/tadoku.htm>>

2018年8月20日アクセス。

翻訳書の刊行：『ラヴェルスタイン』

鈴木 元子 (国際文化学科)

アメリカのノーベル文学賞作家ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) の最後の長篇小説『ラヴェルスタイン』(Ravelstein (2000)) を本邦初訳し、この春東京の出版社から出版することができたのは、私にとって望外の喜びであった。

とはいえ、ソール・ベローと言っても、残念ながら、日本ではそれほど名前が知られているわけではない。いや、アメリカ文学と言っても、「それは何ですか？」と聞かれてしまう御時世である。けれども、アメリカでは、20世紀を代表する偉大な作家として広く知られている。全米図書賞を3回も受賞したのは、ソール・ベロー以外にはいない。さらにピューリッツァー賞、及びノーベル文学賞を受賞し、1990年には全米図書基金米文学功労勲章を授与された。

ノーベル文学賞を受賞したアメリカ人には他に、ユージン・オニール、パール・バック、ウィリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイ、ジョン・スタインベック、トニ・モリスン、ボブ・ディランなどがある。これらの作家名からは、たとえひとりの名前であってもそれぞれに何らかの文学的系統やグループが脳裏に浮かんでくる。ソール・ベローの場合は、ユダヤ系アメリカ文学のトップランナーであったということだ。

ユダヤ系アメリカ作家については、『ディヴィッド・レヴィンスキーの出世』(1917) で有名なエイブラハム・カーハンに続いて、20世紀に多くの作家が現れたが、とくに1950年代から60年代のアメリカ文学を席捲したのが、ソール・ベロー、J・D・サリンジャー、ノーマン・メイラー、バーナード・マラマッド、フィリップ・ロスなどであった。彼等の文学作品には、ユダヤ系移民たちが、アメリカ世俗社会(国家)とユダヤ伝統文化との間で葛藤する姿が描かれている。

これらの作家たちは、フィリップ・ロスが2018年5月22日に死去したことで皆亡くなってしまったが、ベローの次の世代のポール・オースターや、孫のような若手ジョナサン・サフラン・フォアなどのユダヤ系作家が次々と現れて、ホロコーストや同化の問題をテーマに小説を書き続けている。

『ラヴェルスタイン』は、語り手で作家のチックと、その親友で政治哲学が専門のエイブ・ラヴェルスタインとの友情を描いた小説である。それは勿論、ソール・ベローとアラン・ブルームとの友人間の愛情を土台にしているが、そのみならず、ベローの最後の小説にふさわしい総決算的な芸術作品に仕上がっていると言えるだろう。ユーモアを交えた特徴的な語りによって導かれて、生と死、哲学と歴史、愛と友情について、行きつ戻

りつ、ふたりの対話は展開していく。つまり、この作品を読む我々は、ベローの愛に惹きつけられ、彼の記憶を通して一緒に旅をしているような気分になる。

昨年度から「英語上級 翻訳」という科目を担当している。翻訳術の将来的展望とは——特許関係の翻訳は高性能の翻訳ソフトの登場で仕事は減少するらしいが、文芸書の翻訳は未だ機械では無理で、人間による翻訳が必要であるらしい。

私はこの邦訳書を出版するまでに、『ソール・ベローと「階級』』(第5章第3節)、『ユダヤ系文学と結婚』(第6章)、『Ravelsteinにみるチックの語りの妙技』(『研究紀要』第16巻)、『彷徨える魂たちの行方』(第13章)と、Ravelsteinに関する論文を4本発表してきた。前後するが、2014年の夏には、ベローの生誕地であるケベック州モンリオールを訪れ、カナダ最古で、かつ世界大学ランキングでは常にトップ20に入っているマギル大学に行くと、大学院図書館でRavelsteinに関する論文や記事をダウンロードして、USBに入れて持ち帰った。これらの研究があって初めて可能となった翻訳であった。

そればかりではない。ソール・ベロー関連の地や、『ラヴェルスタイン』に登場する場所に赴いたのは、今となっては楽しい思い出である。ニューヨーク、イスラエル、エチオピア、シカゴ(大学)、マサチューセッツ州の田舎、ボストン(大学)、バーモント州、モンリオールのラシーヌ、パリ、ポーランドのアウシュビッツと。唯一、邦訳書の出版までに行けなかったのが、カリブ海にあるセント・マーチン島(サン・マルタン)である。今後の課題として、いつかこの島を訪れ、ソール・ベロー夫妻が滞在した夏の家を見つきたいものである。

本学では国際文化演習(ゼミ)で、ここ数年、ソール・ベローの作品を精読している。彼の小説を通して、日本人に未知の世界が開けてくる。日本人のマインドがユダヤ系アメリカ人のマインドに触変して、さらにスマートで、しなやかなグローバル日本人になる、そんな魔法の種のような何かがあるのではと潜んでいると思えてならない。



活動報告 SUAC Report

『中東欧の文化遺産への招待』刊行と学部間共同研究の可能性

四方田雅史 (文化政策学科)

今春、本学の研究者と共同で、しかも本学の出版助成もいただいて『中東欧の文化遺産への招待：ポーランド・チェコ・旧東ドイツを歩く』（青弓社）という本を上梓することができた。まず同書をなぜ刊行するに至ったのか、編者の1人として経緯を説明しよう。

2012年の年末か、13年のはじめに、まちづくりや創造都市に造詣の深かった故根本先生から「今度ポーランド・チェコあたりに産業遺産の調査に行きませんか」との提案をいただいたのがそもそもの始まりである。これまで西欧を中心に調査してきた先生にとっても中東欧に行くのは一大転換であったし、私を含めほかの研究者にとっても、ポーランドやチェコは西欧に比べ印象の薄い国であったことは確かであった。

しかし調べてみると中東欧が西欧とは異なる独自性があることが分かってきた。第一次大戦まではポーランドやチェコスロバキアは独立国ですらなかった。偶然にも同書が出た今年は両国独立100周年にあたる。その後も欧州の激動に翻弄され続けている。第二次大戦にはナチスの占領を受け、戦後もソ連の影響下で共産主義政権が成立する。そして1989年のベルリンの壁崩壊後はヨーロッパ連合（EU）に加わって現在に至る。このように見ていくと同地域は西欧やわが国のように独立国として主体的な歴史が続いてきた地域とは明らかに異なる。また欧米の影響を受けつつ文化財や文化政策が独自の展開を遂げていることも分かってきた。そう考えると先ほどの提案も外的外れではないと思えてきた。

こうした理由をつけて2013、15年度に学内の研究費を申請して採択され、本学の研究者が集まって中東欧の文化遺産や文化・文化政策全般を研究する私的な研究会が生まれたのである。そして二年の夏には当該地域に調査に赴いた。さらに15年度にはデザイン学部の教員もメンバーに加わった。こうして現地調査や文献研究を重ねていくうち、各々の専門からの知見には貴重なものがあることにも気づかされた。これが同書刊行を決めた理由である。さらに内輪の報告書を作成した約半年後に提案者の根本先生が急逝され、先生の遺稿を一部編集しつつも公刊してより多くの方に知ってもらうというミッションも突如加わることになった。

本書の特徴として次の3点を挙げるができる。第1の特徴は多様な文化遺産を取り上げたことにある。文化財の世界的指針でもある世界遺産では、近年歴史的街並みや産業遺産、20世紀の建築などを重視する姿勢を鮮明にしている。同書でも、ザモシチなどの歴史的街並み、岩塩坑などの産業遺産、ナ

チス・社会主義時代の20世紀遺産といった新領域を取り上げた。ナチス・社会主義時代の「負の遺産」も欠かせない。文化遺産はもともとその国の栄光を示しそこから国民意識を高めることが期待されてきたが、人類にとって忘れてはならない過ちや悲劇を示す遺産も存在する。有名なアウシュビッツ・ビルケナウ収容所はその代表例である。本書でも取り上げたシンドラ・ファクトリーも「負の遺産」に位置づけられるが、映画「シンドラのリスト」の舞台として一般受けを狙っているのか、展示にはアトラクション的要素が強かった。こうした展示は議論の分かれるところである。くわえて中東欧諸国は現在主な民族が多数を占める「単一民族国家」に近い構成となっているが、かつてはそうではなかった。多文化主義の影響もあって第二次大戦で虐殺されたユダヤ人や戦後追放されたドイツ系など少数民族の遺産も保存すべきものとなっている。本書ではユダヤ人が各地に残してきた遺産も扱っている。このように本書は、ガイドブックでは扱われない新領域の文化遺産やそれらが遺産とみなされる中で生じる課題にも論及している。

第2の特徴は文化遺産が他の文化・文化政策諸領域との結びつきを強調したことである。映画などのメディアと文化遺産の関係、そして産業遺産とアート・創造都市との関連など、文化遺産と文化政策が織りなす多面性をも浮き彫りにした。

最後は、両学部のコラボレーション的要素が強いことである。プロダクト・デザインを専門とする峯先生、建築を専門とする海野先生も執筆している。両先生の寄稿からは、デザインや建築をベースとした観光や文化資源というジャンルが存在しうることを再認識した。そうした新領域の発見は学部横断的な共同研究の成果だと誇ってよい。

来年度から本学で「文明観光学コース」が立ち上がる。このプロジェクトが立ち上がった2013年当時その構想すらなかったが、まさに「文明観光」を先取りする共同研究になったと言えるのではないだろうか。一読いただければ幸甚である。



地域の劇場文化を日本の顔に －「専門性」と「市民参加」

永井 聡子 (芸術文化学科)

「知識と現場では大きな差がある！」とは、履修学生の言葉。ことしの夏は「芸術文化基礎」(永井クラス)2年生14名でランチタイムコンサートを企画しました(2018.7.18)。現場では知識が邪魔になることがあります、「知識は入れるが発揮しない」のが大事。そして何よりも演者、観客の環境を質のよいものにするための“想像力”を働かせて、互いに感謝をしながら現場をこなすこと、という恐ろしく難しい課題を学生に課しました。それでも、出演者と指導の私の“背中”を見て動いたという学生の言葉で胸をなで下ろし、印象的な今年の授業となりました。

■11年の歩み《2008年－2018年》

私が2008年本学に着任してから継続して実施している学内企画は、静岡文化芸術大学開学10周年記念ミュージカルドラマ「いとしのクレメンティン」初演(2010年)をはじめとして、「劇場プロデュース論」「演劇史」「演劇文化論」等授業の一環で公開授業として実施し、今年で11年目を迎えました。劇場・演劇研究は、演劇×音楽(音響効果)はもちろんのこと、舞踊も美術も伴う総合芸術。劇場空間という場所において、企画者(プロデューサー・制作者)、劇作家、作曲家、舞台美術家、舞台照明家などの劇場人が力を合わせて感性をぶつけあう結晶たる世界。それゆえに、劇場建築家からは“劇場という宇宙”と評される。学生に普段触れる機会のない生演奏で紡がれるドラマ作品に触れて想像力を養ってもらおうという企画でもあります。今年の「演劇史」のゲストには、いまや“時の人”義足のダンサー・大前光市さん、俳優の吉武大地さん、コントバス奏者の榎原利修さん(セントラル愛知交響楽団団長)、ピアニストの榎原祐子さん、「演劇文化論」には、人形遣い・豊松清十郎さん、日本舞踊の花柳ゆず留さん、花柳輔蔵さんにお越し頂きました。ご協力頂いたゲストとのご縁を大切にしながらここまで続けてこられたことに感謝しています。

■劇場の「専門性」

「劇場」を空間としてではなく、そこで創造される作品や、それを取り巻く人材、集う観客を総合する概念と捉えると劇場のもつ意味が時代を超えてきます。日本でも海外でも常に集う観客という市民が仕上げるこの劇場こそが、日本のこれからの文化を守る場所であると考えます。この10年間、私の授業で「理論と実践の組み合わせ授業」を行ってきたのは、劇場が専門領域を有する以上、専門知識と専門家としての問題意識を育む土壌がなければ、地域の劇場は存在しえないという認識からでした。“みんなで楽しくつくりあげる地域のエンターテインメント”というのは幻想。“楽しい作品”を生み出すのは、専門の領域を意識しどんな苦労をもプラスに変えていくエネルギーを持ち合わせた人材と互いの感謝の気持ちしかありません。そこにやっと本当の市民参加というものが存在します。これを理解しないまま、企画という領域、あるいは知識を詰め込むだけの学びには、学生の意識から“現場の極意”を一瞬にして木端微塵にする負の力も潜んでいます。

■劇場の「市民参加」

劇場において、舞台製作の専門性が必要だということは、市民の皆さんはよく理解されています。その上で地域の劇場では「専門性」のあり方と「市民参加」の方策を考える必要があります。劇場は、この2つを両輪とするところが非常に難しくもあります。例えば、ゲストの大前光市さんとの共通認識は、障害は身体にあるのではなく、人が決めた価値観に人を当てはめ自分自身で判断しないことに障害があるということ。劇場の「市民参加」とは、この意識改革、つまり価値観には多様性があり、意識的に実行に移すことのできる“成熟した市民”を舞台製作や市民参加企画を通して理解していくことです。その拠点となるのが劇場です。そして劇場で意識が積み重ねられることによって空気のように存在しながら、確実に地域を活気づけ、やがて誰もが認める文化となる。劇場がそういう場でもあること、演劇・劇場研究と劇場運営に関わった20年から得たことを学生に伝えていきたいと思っています。なぜ劇場が必要なのか、みんなが考える授業になるよう、さらに精進したいと思っています。



地域に研究室を持つということ

磯村 克郎 (デザイン学科)

デザイン実務を経て本学で大学教員に転身しようとする時に、研究室を見学する機会を得た。統一された約4m×約8mのこれから教育研究に従事できる空間を見て、頭の中ではすでにレイアウトを想像しながら心躍ったものである。

研究室には、その教員の活動や個性が現れる。部屋の形状は同じでありながら、驚くほど多様な空間になるのが研究室である。これに着目した「教員の研究室における空間の使い方研究」(高橋佳子, 平成28年度空間造形学科卒業研究)では、本学研究室の多様性の記録と分類、活用の仕方と空間づくりへの提言があり、誰の研究室か想像しながら読むと面白い。磯村研究室も調査サンプルのひとつであるが、設計事務所のアトリエと評された。その通り、公共物や公共空間のデザインを専門としているので、産学協同活動を学生や企業の方と行ったり、地域の方や行政とまちづくりの相談を行いやすい空間にしている。進行中のプロジェクトの図や様々な資料を配置し、活動を視覚化することで一定のプレゼンテーション効果を発揮できていると考えている。

着任以来、浜松市の中心市街地活性化の審議会やプロジェクトに関わり続けている。以前の特別研究においても、市民の方々による様々な地域活動を調査し、継続的に交流していただいている。3年前からは、鍛冶町大通り再生の地域プロジェクトにアドバイザーとして、研究室として参加中である。関係者とお話しするとしたら研究室に来ていただくのが双方当たり前のようになっていた。元々、色々な現場やクライアントを抱えながらデザイン実務を進めていた身では、相手先を訪ねていくほうが普通である。お迎えすることでできる情報交換もあるが、相手先で受け取る情報や発想は大切である。また、鍛冶町大通りのプロジェクトでは、地元との交流や街区の大きい模型をいくつか作る必要性が生じていた。

そこで、現場で活動できる拠点が必要だと地元と相談し、当初は、浜松商店界連盟の会議室をシェアすることができた。鍛冶町大通りに面し、通りを見晴らすことができるマルHビル5階のフロアである。ここでは、商店界連盟の会議やレンタルスペースとして使用される以外の時間で活動する許可をいただき、壁面にはプロジェクトの資料を展示し、模型を作っては片付け、研究室の学生達と「現場事務所」として活動をした。しかしながら、シェアの形態では活動に限界があるし、いつまでも商店界連盟にご迷惑をおかけすることもできない。平成29年8月から平成30年3月までがシェアできる期間となり、次の活動拠点を探すことになった。

同じ時期に地域連携室から、空きビルに学生向けのイベントスペース等を企画しているディベロッパーを紹介していただき、相談に乗ることになった。似たような活動をしている拠点として、研究室ではなくマルHビル5階のフロアで相談することにした。先方からは、まさにこのような場をつくりたかったと感想をいただき、ついでに近くにある候補の空きビルを見学する

ことになった。そこは、浜松市の防災建築街区として建設された共同建築の五区画のうちの一區画で、1, 2階はイベントスペースとして想定されていたが、3, 4階には表裏に窓がありテラスや屋上に通じる用途未確定の魅力的な部屋があった。

次の週に意を決して、とてもまちなかの家賃は払えないが、企画のコンセプトを共有した研究室活動を展開できるとディベロッパーに交渉し、幸運なことに3階(約50㎡)にまちなかのサテライト研究室として入居できることになった。(入居にあたっては、ディベロッパーはもとより地域連携室や財務室をはじめとした事務局のご理解とご助力を多々いただいた。また、SUAC映画祭実行委員会には、ビルで映画祭を実施いただいた。)

浜松市中心市街地活性化基本計画区域の北東の片隅に本学は位置しているが、サテライト研究室の位置は区域の中でも都市再生緊急整備地域の中である。学生にしても我々教員にしても、大学周辺や浜松駅との行き来で、ややもするとまちなかへの動きが少なくなりがちであるが、サテライト研究室での活動に集まる学生や私の動線によって、もうひとつの流れを形成できる。鍛冶町大通りの構想模型をつくりながら、すぐに現場を見て検討することができる。企業や地域の方が面白がって訪ねてくれる。歩くとき知り合いに出会い、なにより地域の一員という実感がある。

空洞化が言われている浜松市まちなかではあるが、近年、ゆりの木通りが、万年橋パークビルを起点に活性化したユニークな商店街として注目されている。これをまちなかの東西の軸とすると、サテライト研究室がある田町中央通りは、それと直交する南北の通りである。その交点には空きビルを活性化させたKAGIYAビルがあり、南にはお世話になったマルHビルが、北には本学卒業生による建築設計事務所が空きビルを借りて運営する田町スクエアがある。サテライト研究室は、これらの一員となってまちづくりの南北軸を形成するのが次の戦略である。



2017年度 文化・芸術研究センター事業実績

〈特別研究〉

研究名	代表者		目的及び内容
	学科	氏名	
静岡文化芸術大学における多文化共生分野の研究体制整備に向けた研究	国際文化	池上 重弘	第2期中期計画に定められた「多文化共生の推進」の実現に向けた具体的な研究体制整備のため、文化・芸術研究センターの在り方や大学名所化プロジェクトの議論を踏まえつつ、両学部との連携を図りながら研究する。
大学・大学生による浜松の中山間地域における集落の維持と地域づくりの可能性についての研究	文化政策	船戸 修一	船戸ゼミによる浜松の中山間地域における、①集落調査を踏まえた地域づくりの実践、②中山間地域の資源を活かしたビジネスモデル構築の取り組みによって、浜松の中山間地域における集落の維持あるいは地域づくりの方策を構想する。
SUAC芸術経営統計の2時点比較にもとづく我が国の芸術文化団体の分析	芸術文化	片山 泰輔	平成25年度実施の我が国初の包括的な芸術経営統計調査の継続調査を実施、2時点間の変化を分析するとともに、近年重要性が高まっているメディアアート施設を調査項目として独立させ、その実態把握の充実を図る。
浜松と遠州における染色の技法とデザイン	芸術文化	立入 正之	浜松および遠州地方の、繊維産業における「染色の技法とデザイン」の歴史と展開の調査と、今後の新しい染色デザインの追求と提案を行い、浜松染色のさらなる発展に貢献する。浜松市博物館との研究連携も推進する。
地域伝統建築・工芸とデザイン活動に関する研究	デザイン	伊豆 裕一	近年注目を集める、伝統建築・伝統工芸と近代建築・近代デザインのマッチングに対応するデザイン人材の育成に向けた、専門知識・スキルの修得を目的としたデザイン教育についての調査・研究。
誰もが一緒に「音楽」を楽しめるツール・環境の研究	デザイン	谷川 憲司	・誰もが容易に音楽を楽しむことのできるツールを開発して、活用場を設け、効果を検証する。 ・本学の重点領域である、アートマネジメントとユニバーサルデザインの両テーマを融合させ、かつ地域との連携を図ることによって推進する。
SUAC発のUD価値創造に向けた萌芽研究	デザイン	小浜 朋子	「1：グローバル視点のUD研究①おいしさの要因、②色領域の若年者と高齢者の比較」と、「2：公共空間における表示物と周辺環境の条件」の研究を行い、商品や論文など具体的かつ明確なUD価値をSUACから発信する。
eBookを活用した授業の可能性を考える	文化政策	野村 卓志	本学でeBookを活用した授業を行なうために必要な環境整備や事前指導の必要性などを検討する。このために、実際にeBookを契約して講義内における活用や予習・復習などを学生に行わせる。
デジタルものづくりを支える匠技能育成プログラム	デザイン	望月 達也	CAD/CAMが産業界に広く普及し、デジタルものづくりへが加速している現在、デジタル匠の技能が緊急の課題になっている。伝統的な工芸品などを3Dプリンターのような現在の技術で制作するためには、CADによるモデリングが不可欠で、そのための特殊な技能を修得した匠を育てる必要がある。本研究ではそのための育成プログラムを開発し、伝統的な文化と最先端の技術との融合を図り、地域産業のイノベーションを図る。
発達障害者向け自動車運転免許取得のための支援教材の検討	デザイン	宮田 圭介	平成26、27年度特別研究「発達障害者のための自動車運転支援デジタル教材の検討」で試作した、発達障害のある教習生向け学習教材アプリの自動車教習所における有効性実証と改良を目的とする。
国際デザインワークショップマネジメントの研究	デザイン	高山 靖子	デザイン教育の国際化を図るため、各デザイン系大学で取り組まれ始めた国際ワークショップの事例を収集、分類し、得られる成果の違いや問題点やその解決方法などを明らかにし、そのマネジメント手法の構築を目指す。
VRテクノロジーを活用した新たな視覚体験についての研究	デザイン	和田 和美	・人間の感覚機能の拡張であるVR（バーチャル・リアリティ）についての基礎研究とそれを活用した新しい視覚体験の可能性についての実験と開発 ・開発したインタラクティブコンテンツのエンターテインメント施設や公共空間への応用と展開 ・先進的なインタラクティブ映像コンテンツ制作に対応していくスキルの教育への展開と効果
動物介在教育のための空間デザインに関する研究	デザイン	亀井 暁子	教育に動物が介在する「動物介在教育」の実践の場となる空間について、空間デザインの観点から研究を行うことを通じて、動物介在教育が意図する効果が発揮される空間デザインについての手法を考察する。
浜松市のNPO団体の自己資金と行政資金の関係性の調査	国際文化	下澤 嶽	浜松市におけるNPOの公開資料をデータベース化し、NPOの自己財源の変化を把握・分析する。また、行政資金とNPOの自己資金の関係を明らかにし、NPOの自己資金を成長させる行政資金のあり方を提言する。
伝統工芸技法応用オーディオスピーカーの試作研究（仙台筆筒技法及び駿河漆指物・蒔絵技法の応用化）	デザイン	永山 広樹	2016年度に引き続き2年目となる2017年度の申請では、一次試作スピーカーによる感性評価に加え定量評価（周波数特性測定等）を実施。その結果を踏まえた2次試作を実施してスピーカーの感性評価及び定量評価実験を行い伝統技法応用による音質・音色の向上検証と製品化への検討を行うことを目的としている。
余白の研究（絵本イラストレーションの画像解析）	デザイン	かわ こうせい	視覚伝達デザインにおける余白の定量的な解析方法を確立する。 絵本イラストの解析によって、余白の観点から視覚伝達デザインを多角的にとらえなおし、デザインを行う際に活用できる技法を獲得する。

〈イベント・シンポジウム〉

イベント名	代表者		実施内容
	学科	氏名	
静岡県多文化共生実態調査 2016の詳細分析結果報告会	国際文化	池上 重弘	日時：10月24日(火) 13:30~16:30 会場：静岡県教育会館 4階大会議室 主催：静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター、静岡県 後援：公益財団法人静岡県国際交流協会（SIR） 内容：静岡文化芸術大学と静岡県の共催により、10月24日(火)に「アンケート結果から見える多文化共生の最前線—静岡県多文化共生基礎調査2016の詳細分析報告会」を静岡県教育会館において実施した。小坂拓也（静岡県）が静岡県の多文化共生施策と多文化共生基礎調査の概要を説明した後、調査結果を分析した以下の3報告が行われた。池上重弘（静岡文化芸術大学）「日本人調査から見える多文化共生意識の変容」、竹ノ下弘久（慶應義塾大学）「地域社会における外国人の生活と居住」、中川雅貴（国立社会保障・人口問題研究所）「外国人の就労状況に関する分析」。その後、参加者との間で質疑応答のディスカッションが行われた。
浜松市の中山間地域再生の可能性 と課題についてのシンポジウム [2018まちむらりレーション市民 交流会議～浜松の中山間地域の可 能性を考える～]	文化政策	船戸 修一	日時：2月6日(火) 12:30~16:45 会場：浜松市天竜壬生ホール 主催：浜松市、静岡文化芸術大学 内容：本学と浜松市役所（市民部市民協働・地域政策課）との共催で、天竜壬生ホールで開催し、天竜区佐久間町のある集落における船戸ゼミの調査結果を発表した。この発表では、集落から転出した子どもや孫の存在が実家に通っている事実を明らかにすることによって人口が減少しても集落が残り続ける可能性を論じ、そのため地域づくりの方策を提案した。このようなシンポジウムを通じて、浜松の中山間地域の住民をエンパワーメントするとともに、本学が浜松の中山間地域への貢献姿勢をアピールした。
フェアトレード全国フォーラム 2017 in Hamamatsu	国際文化	下澤 嶽	日時：11月19日(日) 10:00~17:20 会場：静岡文化芸術大学 主催：浜松フェアトレードタウン・ネットワーク、一般社団法人日本フェアトレード・フォーラム 共催：浜松市 内容：午前中は、基調講演、パネルディスカッション「フェアトレードから地域を変える浜松を事例に」を講堂で実施。その直後に、浜松市がフェアトレードタウンに認定を受けて、認定式を実施することができた。午後は「フェアトレードタウンをめざそう」など、8つの分科会を各教室で実施した。夜は、パーティを生協食堂で実施し、関係者と浜松市のフェアトレードタウン認定を祝った。
ユニバーサルデザイン 絵本コンクール2017	文化政策	林 左和子	日時：(表彰式) 11月18日(土) (展示会) 11月18日(土)~11月23日(木・祝) (作品募集) 9月1日(金)~10月16日(月) 会場：ギャラリー 主催：静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター 後援：静岡県、静岡県教育委員会ほか 内容：子ども部門43点、高校生部門3点、一般部門12点の計58点の応募があった。その中から、大賞1点、ユニバーサルデザイン研究賞1点、審査委員長特別賞1点、子ども部門優秀賞3点、佳作4点、一般部門優秀賞1点、佳作2点そして今年初めての学生大賞1点が選ばれた。11月18日~23日の6日、応募作品の展示会を本学ギャラリーで開催し、141人の来場者があった。また入賞作品などは、2018年3月15~16日・19~20日には浜松市役所1Fロビーで、3月24~25日には東京・大崎で展示が行われた。
第5回SUAC&SPAC連携事業 現代劇上演とシンポジウム	芸術文化	梅若 猶彦	日時：10月9日(月・祝) 14:00~ シンポジウム 15:30~ 会場：静岡文化芸術大学 講堂 主催：静岡文化芸術大学 共催：SPAC-静岡県舞台芸術センター 内容：現代劇「喫茶店のなかの非日常」作/演出：梅若猶彦、配役：SPAC俳優：三島景太氏、片岡佐知子氏、関根淳子氏及び本学学生1名にて上演。照明のオペレーションはSPAC事務局の高林利衣氏によって行われた。音響は梅若ゼミの学生。現代劇上演後開催したシンポジウム「境界線の問題」は立入正之（教授）司会により、パネリストとして上記のSPAC俳優3名に加え、高田和文理事、真嶋氏（梅若ゼミ学生）と梅若の参加で行った。
ホスピタルアートプロジェクト しずおか	芸術文化	高島知佐子	実施期間：4月1日~3月31日 会場：浜松労災病院、駿府博物館、神奈川県子ども医療センター 共催：浜松労災病院、駿府博物館、静岡県立子ども病院 協賛：公益財団法人ベネッセこども基金 内容：具体的には次の3つの活動を行なった。①浜松労災病院で、「医療を支えるモノとヒト」をテーマにした写真展を開催した。通院や入院では見ることのできない病棟の裏側を浜松在住のカメラマンに撮影してもらい、病院職員に写真選定とキャプション（患者に伝えたいこと）作成をお願いし、院内約10ヶ所に展示した。②静岡県立子ども病院で、いきものづくりワークショップを2回行い、その作品を展示した「へんとてこてこ展-子どもと学生とホスピタルアート」を駿府博物館で開催。その後、展覧会に行けない患者や家族を対象に、同じ展覧会を静岡県立子ども病院でも開いた。③このほか、2016年度の活動で行ったWSを神奈川県子ども医療センターでも行った。

イベント名	代表者		実施内容
	学科	氏名	
SUAC映画祭	芸術文化	高島知佐子	<p>日程：12月1日(金)・2日(土) 会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー/瞑想空間 内容：6月と12月にそれぞれ3日間の映画祭を開催した。作品を上映するだけでなく、上映後に毎回、映画にちなんだワークショップやトークイベントを行うことで、映画祭を通じた文化理解と地域交流を深めた。</p>
メディアデザインウィーク2017	デザイン	的場ひろし	<p>内容：学生作品の展示、関連分野の専門家による講演、ワークショップで構成されるイベントで、今年で6年目の開催となった。 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市、中日新聞東海本社、静岡新聞社・静岡放送、FM Haro!</p> <p>【学生展示】 日時：2月5日(月)～9日(金) 12:00～18:30 会場：本学 ギャラリー 概要：本学デザイン学部3年生作品を中心に展示・上映を行った。</p> <p>【ワークショップ】 「スケッチング」 日時：2月10日(土) 13:00～18:30、2月11日(日) 10:30～16:30 会場：本学 マルチメディア室 講師：長谷部 雅彦(「奇楽堂」主宰 新インターフェース「touchMIDI32」開発者)、 照岡 正樹(「VPP」同人 筋電センサ「VPP-SUAC」共同開発者)、 長嶋 洋一(デザイン学科) 概要：デザイン/メディアの領域で注目されている「スケッチング」(物理コンピューティング)をテーマとしたワークショップ。</p> <p>【講演会】 講演1 「アートディレクターの仕事」 講師：アートディレクター(株式会社ドラフト) 川上 恵莉子 氏 日時：2月5日(月) 18:30～20:30 会場：本学 南176教室 概要：静岡県菊川の丸松製茶場「san grams」のブランディングや、京都のがまぐち専門店「ぼっちり」のグラフィック等を手がけ、2016年にJAGDA新人賞を受賞された、株式会社ドラフトのアートディレクター/グラフィックデザイナーの川上恵莉子氏をお招きし、現在のお仕事の内容を中心に、学生時代の作品作り、就職活動の話題等を含めてお話していただいた。</p> <p>講演2 「電子楽器の100年～テルミン、エレキギター、シンセサイザー・・・そして～」 講師：電子楽器設計者(株式会社KORG 監査役) 三枝 文夫 氏 日時：2月6日(火) 18:30～20:30 会場：本学 南281教室 概要：国際的な電子楽器メーカーKORGの創業当時から中心的な設計者/開発者として活躍されてきた、三枝文夫氏をお招きして、20世紀初頭から始まる電子楽器の歴史、ご自身が開発された伝説的な名機の数々について、電子楽器とアコースティック楽器の本質的な違いと「楽器の形」について、そして未来の電子楽器の姿等についてお話していただいた。</p> <p>講演3 「実感力と、決断と、実行。」 講師：グラフィックデザイナー 松永 真 氏 日時：2月7日(水) 18:30～20:30 会場：本学 南176教室 概要：資生堂のサマー・キャンペーン、一連の平和ポスターから、ベネッセ、ISSEY MIYAKE、国立西洋美術館などのCI計画。そして、スコッティ、カンチューハイ、国際コンペ優勝の仏たばこジタン、資生堂ウーノのパッケージデザイン等々、数々の著名なデザインを手掛けられた松永真氏をお招きして、氏の広範囲なクリエイティブ活動についてお話していただいた。</p> <p>講演4 「欧文デザインの仕事～欧文ロゴタイプ、欧文書体、カリグラフィー～」 講師：タイプフェイスデザイナー 立野 竜一 氏 日時：2月8日(木) 18:30～20:30 会場：本学 北333教室 概要：欧文ロゴタイプ、欧文書体デザイン、カリグラフィーと多彩に活躍する立野竜一氏をお招きして、新書体制作のプロセスやサントリーの商品ロゴデザインなど、欧文デザインの仕事についてお話していただいた。また、実際の文字制作のプロセスを撮影した動画の上映も行った。</p> <p>講演5 「AAA～アートとアニメとアニメーション～」 講師：アーティスト(平面及びアニメーション) 水野 健一郎 氏 日時：2月9日(金) 18:30～20:30 会場：本学 南281教室 概要：アニメーション、グラフィック、ドローイング、ペインティングなど、多様な手法で創作活動をくり広げる鬼才、水野氏を招き、「ヤバイ絵」をキーワードに、これまでの軌跡、作品、周囲の作家たちについてお話していただいた。</p> <p>講演6 「ビデオゲームの黎明期とスペースインベーダー」 講師：ゲームデザイナー(株式会社タイトー アドバイザー) 西角 友宏 氏 日時：2月10日(土) 14:00～16:00 会場：本学 南281教室 概要：株式会社タイトーにて、70年代からビデオゲームに携わってきた西角友宏氏をお招きして、ビデオゲームの黎明期について、西角氏の代表作(ルール作り、キャラクターデザイン、ハードウェア開発、プログラミング等々の作業を一人で!)であり社会現象にもなった「スペースインベーダー」について、そしてビデオゲーム作りのコツ等についてお話していただいた。</p>

〈地域貢献・連携事業〉

イベント名	実施内容（実績報告書）
第17回特別公開講座 「新能」	日時：10月4日(水) 18:30～、5日(木) 18:00～ 会場：4日 本学 講堂、5日 本学 出合いの広場 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 内容：4日は、能講座を実施し、「天鼓と典故の探し方」と題して、中京大学・明木茂夫教授による講演、プロジェクト参加学生による能「天鼓」の解説を実施、5日は、本学・出合いの広場（屋外）において新作狂言「鈴虫」、独鼓「松風」、能「天鼓」を上演し、二日間で延べ580人の市民が来場した。
前期公開講座 「ラトビア文化ウィークス」	6月16日(金)：イブニングトーク「超入門！ラトビア」 講師：四方田 雅史 准教授（文化政策学部）、山本 紗知 講師（文化政策学部）、 天内 大樹 講師（デザイン学部） 6月17日(土)：シンポジウム「ラトビア、生活と文化」 「ラトビアに根付く歌う文化」 講師：岩手大学 人文社会科学部 准教授 堀口 大樹 「ラトビアの伝統工芸と暮らし」 講師：神戸雑貨店SUBARU 店主 溝口 明子 「リガの発展と建築」 講師：天内 大樹 講師（デザイン学部）
後期公開講座 イブニングレクチャー「浜松が危ない。地球編、生物編」	12月8日(金) 「浜松が危ない。地球編『地震津波をはじめとした自然災害』」 講師：ふじのくに地球環境史ミュージアム 菅原 大助 准教授 「浜松が危ない。地球編『地球温暖化、人類の環境破壊』」 講師：ふじのくに地球環境史ミュージアム 山田 和芳 教授 12月15日(金) 「浜松が危ない。生物編『静岡レッドデータブック』」 講師：ふじのくに地球環境史ミュージアム 渋谷 浩一 教授 「浜松が危ない。生物編『ヒアリをはじめとした外来生物』」 講師：ふじのくに地球環境史ミュージアム 岸本 年郎 准教授
後期公開講座 「メディアデザインウィーク イブニングレクチャー」	2月7日(水)：「実感力、決断と、実行。」 講師：グラフィックデザイナー 松永 真 氏 2月20日(火)：「楽器とデザイン」 講師：ヤマハデザイン研究所 所長 川田 学 氏
夏季公開工房	8月26日(土)・27日(日) 本学 自由創造工房 ①「銅版画を制作しよう」 講師：佐藤 聖徳 教授（デザイン学科） ②「石膏デッサンを描いてみよう」 講師：山本 一樹 教授（デザイン学科） ③「テキスタイル 手織りに挑戦！」 講師：種村 興治 氏・桑原 壽子 氏（テキスタイル外部講師） ④「トールペイントを楽しもう」 講師：伊豆 里美（トールペイント講師）
春季公開工房	3月17日(土)・18日(日) 本学 自由創造工房 ①「銅版画を制作しよう」 講師：佐藤 聖徳 教授（デザイン学科） ②「石膏デッサンを描いてみよう」 講師：山本 一樹 教授（デザイン学科） ③「テキスタイル 手織りに挑戦！」 講師：種村 興治 氏・桑原 壽子 氏（テキスタイル外部講師）
文化芸術セミナー 「室内楽演奏会2017」	7月15日(土) 18:30～ 本学 講堂 「村松健 ピアノ・三線トークコンサート」 11月18日(土) 14:00～ 本学 自由創造工房 「今を生きるウタリの歌声『北海道アイヌの自然への思い』レクチャー&コンサート」 12月9日(土) 17:00～ 本学 自由創造工房 「日本の民族音楽になったヨーロッパの金管楽器『ラッパの変態』レクチャー&コンサート」 3月17日(土) 14:00～ 浜松市鴨江アートセンター 「教育楽器の魅力再発見『はるのかもえおんがかいかい』」
文化芸術セミナー 「浜松の音楽イベントを知る、学ぶ」	6月1日(木) 18:30～ 本学 南282教室 セミナー講師：後藤 康志（浜松市文化振興財団） 松本 麻未（浜松市文化振興財団）

〈本学における学会開催〉

木簡学会静岡特別研究集会2018	西田 かほる（国際文化学科）
伝承文学研究会 平成29年度大会	二本松 康宏（国際文化学科）
日本第二言語習得学会（J-SLA）第17回年次大会	横田 秀樹（国際文化学科）
芸術工学会 2017年度 秋季大会 in 浜松	磯村 克郎（デザイン学科）
自動車技術会「モーターサイクル工学基礎講座2017」	服部 守悦（デザイン学科）

■ 第18回特別公開講座 薪能

第一夜 能講座 10月3日(水) 午後6時30分開演 (開場 午後6時)
 会場：静岡文化芸術大学・講堂
 講演：「室町人の見た地獄」
 講師：鷹巣 純 (愛知教育大学 教育学部 教授)
 ※学生プロジェクトチームによる「求塚」のストーリー紹介もあります。
 受講料：無料 (全席自由)

第二夜 薪能 10月4日(木) 午後6時開演 (開場 午後5時)
 会場：静岡文化芸術大学・出会いの広場 (雨天の場合は講堂にて開催)
 受講料：¥3,000 (全席自由) ※高校生以下、本学学生は無料
【狂言】：新作狂言
 シテ/監修 井上 松次郎 ほか
 作 種村 公誠 (文化政策学部芸術文化学科 1年)
【能】「求塚」
 シテ 梅若 猶彦、ツレ 泉 雅一郎、梅若 堯之、ワキ 福王 和幸、地頭 観世 鏡之丞、後見 梅若 長左衛門
 ※チケットは全国のチケットぴあのお店、またはセブンイレブン、サークルK・サンクス、ファミリーマート (ぴあ Pコード：488-510)、アクトシティ浜松チケットセンターにて購入できます。

■ 静岡文化芸術大学 「匠」公開講座 「匠とデザイン」

第1回 木の匠『伝統建築の美と技、そして未来へ』
 日 時：10月20日 (土) 午前10時から午前12時
 会 場：南176講義室
 講 師：藤井 恵介 (東京藝術大学客員教授、東京大学名誉教授)
 受講料：無料 (要申込) ※受講資格 高校生以上、募集定員 100名
 同時開催：公開ワークショップ「木造りの技術」
 時間 午後1時30分～午後4時まで、場所 構造実験室
 ※公開講義受講生は見学可

第2回 染色の匠『「染色とは？」から古代伝統染色・茜色まで』
 日 時：12月8日 (土) 午後1時から午後2時30分
 会 場：南176講義室
 講 師：加藤 良次 (横浜美術大学教授)
 受講料：無料 (要申込) ※受講資格 高校生以上、募集定員 100名
 同時開催：公開ワークショップ「染色の技術」
 時間 午後2時30分～午後4時まで、場所 学内工房
 ※公開講義受講生は見学可

申込方法：ホームページ・FAXのいずれかでお申込ください。お申し込みの際には、氏名(フリガナ)、郵便番号、住所、電話番号、受講者区分(一般・高校生)、受講希望日をお知らせください。
 申 込 先：ホームページ <https://www.suac.ac.jp/> Fax:053-457-6123

■ 静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2018

レクチャーコンサート『サロンへようこそ ～貴族が愛したバロック音楽～』
 ※フラウト・トラヴェルソ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロによる演奏を行います。
 レクチャー (講義)：上山 典子 (静岡文化芸術大学 芸術文化学科准教授)
 出 演 (演奏)：青島 由佳 (フラウト・トラヴェルソ)、櫻井 茂 (ヴィオラ・ダ・ガンバ)
 戸崎 廣乃 (チェンバロ)

日 時：11月17日 (土) 午後2時開演 (午後1時30分開場)
 会 場：自由創造工房

入 場：無料 (要申込)

申込方法：E-mail・FAXのいずれかでお申込ください。お申し込みの際には、氏名(フリガナ)、参加人数、郵便番号、住所、電話番号 (FAXの方はFAX番号を添えて下さい)。なお、E-mailでお申込の方は、タイトルに「バロック音楽コンサート希望」と記載してください。

申 込 先：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 E-mail：acrc@suac.ac.jp Fax:053-457-6123

A r t & C u l t u r e



Vol.28

文化・芸術研究センター
ニュー ステター

September 2018

発 行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

